慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期仏蘭西社会主義と階級闘争説 : マルクス以前における階級闘争説発達史の一節
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.10 (1928. 10) ,p.1291(17)- 1349(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19281001-0017
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19281001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（13）民法の規定中請負に關する六三二條乃至六四二條と委任に關する六四三條乃至六五六條とを對照すれば、其何れの規定がより多く引受募集に適用され得るかは極めて明白なことである。請負に關する規定は六三二條を除いては殆んど全部が引受募集に適用するに堪へないであらう。

（14）前掲七九二頁以下

（15）社債の發行を一般的に賣買と解することは決して當を得たるものではない。未來に於て取得すべき物の賣買は可能であるが、然し發行會社は發行前には決して自ら社債權を有することが無いのである。即ち社債發行の場合には社債を引受人に對し移轉するのではなく、新たに發生せしめるのである。即ち民法五五五條に所謂「當事者ノ一方カ或財產權ヲ相手ニ移轉スルコトヲ約シ云々」の規定に適合しないのである。然し勸業債券の郵便局賣出は嚴密な法律上の性質は兎も角其實際の狀態は全く賣買と異る所がない。尙此場合法律上嚴格な意味に於て賣買か否かは郵便局で盜まれた債券の效力にも關聯することになるのである。

（16）前掲七九四頁

（17）商法二六二條八號、二六二條ノ二、六號參照

（18）前掲八三六頁

（19）同上八三八頁

（20）同上八六四頁

（21）同上八六四頁

初期佛蘭西社會主義と階級鬪爭說

――マルクス以前における階級鬪爭說發達史の一節――

加田哲二

筆者は「社會學雜誌」本年十月號以下に「佛蘭西革命前後の階級鬪爭說概觀――マルクス以前における階級鬪爭說の發展史の一節」を題する一文を寄稿した。この論文の主題とするところは、題名の示すやうにマルクスにいたるまでの階級鬪爭說發展史の一節としての佛蘭西革命前後の斯說の叙述であつた。

筆者は先づマルクス階級鬪爭說の學說史的意義を論じ、次に、古代並に中世における階級論の大要を述べ、階級鬪爭說の近代的形態は第十八世紀後半において、發達し來つたといふ見地から、佛蘭西における斯說の發展を概說した。

第一にルッソオを論じ、次に革命以前における經濟的見地からする階級鬪爭論

の二三（ネッケエル、チュルゴウ、レナアル、など）を擧げ、革命時代に入つて、第三階級の政治哲學者としてのアッベ・シイエス、と所謂プロレタリヤ（當時の意義における）の代表者としてのジャン・ポオル・マラアとを記した。而して革命後においては、同革命を第三階級の劃期的功業として讃美する立場から階級鬪爭說を主張し、第三階級の支配權確立と共に、階級平和論に變轉したティリイ、ミニエ、ギゾオを論じて、一先づ記述を終つてゐる。以下の記述はその論文の續編をなすものである。この二つの論文において、筆者は英國における階級鬪爭說を擧げなかつた。普通にマルクス階級鬪爭說の先驅者とせられてゐるアダム・ファグスン、ジョン・ミラア（註一）並にチアチズム運動の理論家を擧げてゐない（註二）。これらの諸家は皆マルクスに影響を及ぼしてゐるに相異ない。例へば、マルクス自身も、ファグスンについては「アダム・スミスの師」といひ、またはアダム・スミスはファグスンの學徒として」といつてゐるやうに、彼に對して尊敬を拂つてゐる。（註三）乍併、マルクスの社會主義研究の第一歩は巴里において行はれ、その資料が佛蘭西の社會主義的著作及びそれに關するものであるとすれば、先づ彼に影響を及ぼしたものとして論ぜらるべきものは佛蘭西社會の著述家でなければならぬ。而して、これらの著述家の研究によつて、マルクスはその社會的理論の基礎を構成しつゝあつたときに、彼はエンゲルスとの交遊によつて英國における經濟學的資料に當面し、これを研究するに至つたのである。

佛蘭西における社會主義は第十九世紀に至つて突如として發生したものではない。このことは既に諸家の研究によつて明かである（註四）。乍併、こゝに主題としてゐる階級鬪爭說についていへば、そは佛蘭西大革命後の社會主義者によつて、取扱はれたのである。勿論第十九世紀初葉の社會主義者も第十八世紀における社會主義者もともに、社會主義的社會の出現を望んだのである。エンゲルスがかの三大空想的社會主義者――オオエン、フリエ、サン・シモン――についていつた言葉を借りるならば、「彼等は、かの啓蒙學者と同じく、先づ特殊な一階級を解放しようとするのでなく、一擧にして全人類を救はうとした。彼等は又同じく、道理の王國

と永劫の正義を實現させようとした。但し彼等の王國は啓蒙學者のそれと較べて、天地隔絶のものであつた。……今日まで純理と正義が此の世界に行はれなかつたのは、只その二者が正しく認識されなかつたからの事である」（註五）。この點において、彼等は共に一である。

而して、第十八世紀の社會主義者はその社會觀において、個人主義的であつた。彼等は個人の自然權の承認充足にその理想的根底を置いた。故に彼等の社會主義的干渉主義はその個人主義的立場と矛盾しない。更らに彼等の社會觀察方法は當時發達し來つた自然科學の影響の下にあつた。彼等の求めた社會本質觀は機械的合法性であつた。故に彼等の社會觀にあつては、ニュウトンの學說はプラトン、モア、並に原始民族の理想社會にも劣らず重要のものであつた。かくの如き自然科學的觀察方法を用ゐる點において、彼等は第十九世紀の社會主義者殊にサン・シモンの實證主義的立場と近似してゐるが如くに見える。乍併、第十八世紀の社會主義者の立場は社會事象の物理的數學的基礎づけの結果として、例へば、モレイ、ドルバックにおけるやうに、社會關係の世界に對して、抽象的法則を轉化しようとしてゐるのである（註六）。第十九世紀の社會主義者はこれと異れる立場に立つ。彼等は社會事象の直接的觀察によつて、社會事象を分裂批判して、社會發展の法則を求めてゐるのである。この點において彼等の方法は實證主義的歷史的方法である。殊に彼等は佛蘭西革命の經驗の批判的研究によつて、歷史における階級の役割を正當に批判し得たのである。第十九世紀の社會主義者はかゝる階級運動の認識において當然第十八世紀の社會主義者と區別せらるべきものでならなければならぬ。彼等の立場は、歷史における階級鬪爭の認識から、更らに階級鬪爭の手段によつて、社會の改造を企てやうとするのではなかつた。寧ろ階級鬪爭の廢絶によつて「全人類を救ふ」ことしたのである。

二

歷史推進の要因としての階級鬪爭を認識したものとして、先づサン・シモンを擧ぐべきであらう。エンゲルスはこの點において、サン・シモンに稱讃の辭を與へてゐる。「彼（サン・シモン）が佛蘭西革命を階級鬪爭と認め、而もそれが單に貴族とブルジョアジイの間だけではなく、貴族とブルジョアジイと無產者の間における階級鬪

爭だと認めた事は、一八〇二年の當時としては、最も天才的なる發見であつた。一八一六年には、彼は政治を生産の科學と解釋し、政治が全く經濟の中に吸收さるべきことを豫言してゐる。經濟事情が政治組織の基礎だといふ思想は、こゝではまだほんの萠芽として現はれてゐるとしても、人に對する政治的支配が物に對する管理及び生産過程の經營に變ずるといふ思想、從つてまた近來に至つて、議論のやかましい『國家の廢滅』といふ思想が既にこゝで明かに表白せられてゐる」と（註七）。

こゝに一八〇二年といふはの、サン・シモンの處女作「一デュネーヴ住民の書翰」(les lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains) の刊行せられた年である。彼はその第二の書翰において、階級利害對立について說いてゐるのである（註八）。

サン・シモンは佛蘭西における階級を三つに分つてゐる。第一階級は人智進歩の旗の下に行進するものであつて、學者、美術家、及び自由思想を有する人の全部から成る。第二階級は「革新不可」といふ標語を持つてゐるすべての有産者であり、第三階級は平等なる言葉に贊成する人類の殘餘を包含する。第一階級は豐富なる腦力を所有する人類の一部であつて、人類の幸福のために智識を供給し、藝術を創造するところの集團である。而して、サン・シモンはこの三つの階級の調和的一致によつて人類の幸福は齎らされるものと見た。然るに過去においては、この調和的一致は存在しなかつたのであつた。佛蘭西の革命運動は最初學者または美術家によつて煽動されたのであるが、其の一揆が成功するや否や彼等は從來その自尊心を傷けてゐたあらゆる制度を破壞した。而して佛蘭西革命の結果は、無智なる人の手に權力が委任せられた當然の結果として、その革命的標識である平等にも拘らず、平等の原理が甚だ殘虐な行爲を行ふと共に、無産者を政治に參加せしめた結果として、有給の治者が甚だしく增加し、被治者の勞働が治者を養ふに不足するに至つたのである。このことは、社會生活における階級的調和の未完成のためであつた。サン・シモンはその「一デュネーヴ住民の書翰」において、かくの如き階級不調和の世界から、智識の尊重による調和の世界の完成を主張したのであつた（註九）。

サン・シモンの階級闘爭説の萠芽は後年に至つて成長した。彼の後年の著作「組織者」(L'Organisateur 1819-20)「産業組織」(Système industriel 1821-1822)「産業者問答」(Catéchisme des industriels 1824) などによつて發展せられてゐる。而して、この内「産業者問

答」における佛蘭西社會史の階級闘爭的解釋は最も屢々人によつて、サン・シモンの階級闘爭說の圓熟したものとして紹介せられてゐるのであるが、余はこゝには「産業組織」におけるそれを紹介したいと思ふ(註一〇)。

サン・シモンのこの論文における立場は社會の歴史を支配する要因は社會における實際勢力の變轉であるといふのにある。而して歴史的進展は當然あるべき理由によつて、然るのであつて、決して偶然的要因によつて支配せらるゝものではない。かゝる立場に立つが故に、サン・シモンはバウル・バアトのいふやうに、階級構成史を始めて佛蘭西について與へ、かくの如くして歴史を文學から實證的科學に成育せしめたのである(註一一)。

歐洲における基督教の普及と北方民族による西部諸國の征服は近代社會の基礎を構成するものである。このことは、佛蘭西においては、第五世紀において始まつたのであるが、本式には第十一世紀に當つて、封建制度が一般に行はれ、ヒルデブラント及びその後繼者の下に精神的權力が完全に組織せらるゝに至つて成立した。而して、この舊時の制度にあつては、社會の現世的權力は武家の掌中にあつた。

即ちすべての動産及び不動産は全く彼に屬してゐて、勞働者は單に彼等の奴隷に過ぎなかつたのである。僧侶は武家貴族と共に封建制度における現世的特權を分つてゐたものであるが、彼等はまた社會の教會的支配權を大小の問題すべてに渉つて所有してゐた。彼等は一般的並に個人的教育を司ると共に、彼等の所論學說はすべての階級並に年齢の人々に對して、その思想並に行爲を決定する標準であつた。かくの如き政治的制度はその後數百年の長きに渉つて、維持せられて來た。當時においては、産業は甚だ幼稚であつたので、戰爭は、それが富の蓄積の手段にしろ、また攻擊防禦の手段にしろ、民族に對する主要なる事業であつた。かくの如き原因から、武士は權力においても、尊敬においても社會の第一位を占めてゐたのは當然であつた。然るに産業者はたゞ從屬的階級としての存在が可能であるに過ぎなかつた。而して實證的科學は未だ成立してゐなかつたし、また僧侶が智識を有する唯一の集團であつたので、彼等は絶對的に智識を支配し、その結果として、社會における優位を確保したことは、眞に必然の勢であつた(註一二)。

然るに文明の自然的進歩の結果として、二つの重大なる事象が起つて、從來の國

家組織を徐々に崩壞せしめるに至つたのである。何となれば、當初の國家が照應して成立した社會の狀態が根本的の變化を蒙るに至つたからである。この二つの事象とは自治體（コンミュン）の解放とアラビヤ人によつて歐洲に輸入せられた實證的科學の實踐であつた。この結果として、元來奴隸であつた產業者は、彼等の主人から與へられた僅少な財產を、その勤勉と忍耐と節儉と新工夫とによつて增大することが出來た。武家貴族は、新らしく產業者によつて生產せらるゝ貨物の提供する享樂を容易に取得することを得るために、產業者の人格に自由を與へ、その代償として貨物を提供せしめることに同意した。この人格的解放は產業の大發展を可能ならしめた。かくて產業者はその生產物を、その欲望と享樂の益々增大して行く貴族に販賣することによつて、著しくその所有を增大した。この二つの相關連してゐる原因の繼續的作用のために、社會における所有分配の狀態は著しく變化し、產業者と農民とが全所有の大部分を領有するに至つたのである（註一三）。

その結果は社會觀の變轉であつた。社會が產業によつてその富を增加する程度に應じて、戰爭は攻擊戰爭としての意義を喪失すると共に、かくの如き變化は西部歐洲のすべての國において起つてゐるので、防禦戰爭の重要性もまた感ぜざるを得なかつた。これに伴つて、武器製造業が社會において單に從屬的役割を勤めるに過ぎざるに至つた。この自然的作用は火藥の發見によつて一層强められたのである。この結果職業教育としての軍事教育は滅亡し、軍事的權力は主として產業に依存するに至つた。產業の發達並に封建制度の崩壞と共に、市民的生活における產業者階級の政治的勢力は封建的支配階級に代つて著しくなつて來たのである（註一四）。

更らに、吾々は精神的發達の方面において社會を觀察すれば、こゝにおいても同樣の完全なる變轉が行はれてゐることを發見する。アラビヤ人によつて歐洲に輸入せられた實證的科學は、その始め僧侶によつて研究せられてゐたのであつたが、間もなく彼等はこれを廢し、新らたに一階級が起つてこの科學の研究に從事するに至つた。この科學の發達及智識の方面における僧侶の優越を根底から覆すに至つたのである。而して、僧侶の政治的並に道德的勢力は、科學的精神の發達と共に發達した個人的批判的態度と共に、喪失せらるゝに至つた。僧侶の勢力失墜

と共に勃興し來つたのは學者の集團であり、彼等は實證的科學の命ずるところに從つて、僧侶の信仰條章の無意義を暴露したのであつた。かくて科學者は僧侶に代つて社會の智識的方面を支配し、僧侶の信仰的條章は單に開化の遲れた人々の間にのみ勢力を有するに過ぎざるに至つた(註一五)。

以上の叙述は第六、第七世紀以來の最も重要なる政治的事象に關する總括であるが、更らにこれを要約すれば、次の如くである。社會の現世的並に精神的權力は一の階級から他の階級に移動した。而して、今日においては、事實上の現世的權力は産業者の、而して精神的權力は學者の掌中にある。この二階級のみが現在においては、國民の思想並に地位に對して顯著なる影響を與へ得るのである(註一六)。

三

サン・シモンは以上に引き續いて、佛蘭西革命の意義について、若干の考察を與へてゐる。

佛蘭西革命の眞の原因は以上のやうな産業と科學との發達による社會的權力の推移によるのである。佛蘭西革命のやうな一大危機はその原因を孤立的の事象に求めることは出來ない。政治組織における變革は一般的原因から惹起せらるゝのである。その一般的原因とは社會の狀態一般であり、變革は舊政治制度が照應してゐた社會がその構成を全然變ずるからである。六世紀以上に渉つて徐々として行はれた社會的並に道德的革命は一の政治的革命を要求した。もし、人あつて、佛蘭西革命の起源を求めるならば、吾々は自治體(コンミュン)の解放と實證的科學の普及を擧げなければならぬ。而して革命の主要原因が現世的並に精神的方面において行はれた權力關係の變轉にあるのであるから、革命を理性的に遂行する唯一の手段は、決定的となつた勢力を政治的行動に入らしむることであり、今日においても革命を終了せしめる唯一の手段である。故に新らしい社會狀態に適應した政治組織を建設する義務は産業者並に學者の當然有するものとされたのである。革命はかくの如くして見事に始まつたのであるが、間もなく誤まつた道を迹るに至つた。そは何故であるか。このことを說明するのは、甚だ重要であるが故に一層委曲を盡さなければならない(註一七)。

人間はある學說から突然他の學說に移つて行くことは出來ない。このことは

人間性に由來してゐる。而してこの法則が文明の自然的過程において、人類が迹つて來ることを必要とした種々なる政治的制度を必然的に發生せしめたのであつた。かくの如き必然性が舊制度から新制度への推移の間に行はれた。即ち軍事的權力に代ゆるに、產業が現世的權力の要素となり、敎會的權力に代つて、實證的諸科學が新らしい精神的權力の要素となる必然性が存するに拘らず、この必然性が實現せらるゝ前提として中間的、過渡期的性質を有する現世的並に精神的權力が發達し、且つ行動するのである。換言すれば、封建的原則から產業的原則への過渡期に對して、一の中間的原則が形成せらるゝのである。この中間的原則は封建的原則の優越を認めながら、權力の行動においては、產業者の利益に照應するやうに制限並に規則を非難してゐる。精神的方面においても、神の啓示に基礎を置く敎會的權力から證明に依存する科學的權力への過渡に對して、一の中間的權力が形成せられる。この中間的權力は一定の根本的の宗敎的信條の優越を承認しつゝ、すべての下位の信條に對する檢討の權利を許したのである（註一八）。これらの二つの中間的原理に照應した社會階級は現世的方面においては法律家の階級であり、敎會的方面においては形而上學者の階級であつた。法律家は元來封建領主の依託者に過ぎなかつた者であるが、間もなく法律的辯護の制度によつて封建的行動を緩和する階級を形成するに至つた。法律的辯護の制度とは權力の濫用に對抗するための組織的制限の制度であつた。同じく形而上學者は神學から發生したものであつて、神學的基礎の上にその理論的證明を基礎づけることを廢することなく、たゞ信條及び道德に對する檢討の權利を設定することによつて敎會的勢力を緩和した。而して彼等の仕事は第十六世紀の宗敎改革と共に始まつて、前世紀（第十八世紀）における智識絕對自由の原則の宣言と共に終つたのである。かくの如くして法律家と形而上學者とは共に過去二三世紀の間政治的舞臺を支配したので、國民一般は彼等こそ、一般的利益の擁護者と見る習慣を形成するに至つた（註一九）。

佛蘭西革命の主要なる誤謬はこれらの二階級を產業者の代表者としての役割を勤めしめたことに存する。社會的事情は既に變化して、法律家並に形而上學者はその役割を演じ終つてゐたのである。革命の本來の目的は新政治組織の建設

にあり、法律家並に形而上學者の任務は單に制度の變更を考案するにあつた。この點からも彼等は革命を有用に指導することは出來なかつたのである。而してこの任務を遂行し得るものは學者と産業者であつた。即ち革命遂行者たる産業者は彼等の間からその代表者を選ぶべきであつた。この誤謬は要するに選ぶべからざる階級から彼等の代表者を選んだ國民一般の誤りであつた。この故に革命はその當然行くべき道を行かなかつたのである。革命の眞の目的は新社會制度の樹立にあるが、この目的は未だ達せられてゐない、故に革命もまだ終末を告げてゐないのである。而して革命によつて實現せらるべき社會は産業者の社會である(註二〇)。

以上の記述を佛蘭西史的にいへば、フランク族のガリヤ征服後二つの階級が發生した。征服者たるフランク人と奴隷たるガリヤ人であつた。奴隷はその征服者のために農耕及び手工の勞働に從事し、これによつて彼等は少額の金錢を得た。十字軍及びその後に起つた奢侈のためにフランク諸侯は多額の費用を必要とし、これがために、彼等はその奴隷に自由を賣らねばならなかつた。この奢侈はまた手工業者及び商人の社會における重要性を增加した。ルイ十一世はこの新興勢力を利用して、フランク諸侯をその支配下に置かんとした。王は彼等と結んで諸侯の地方的政權を奪ひ、町人は都市の政權を奪つたので、諸侯の國家における地位は極度に低下せられ、ルイ十四世治下においては、單に宮廷貴族たる地位を保持するに止まつた。この偉大なる國王の治世に至つて、交易の增加の結果として一の新階級即ち銀行業者が成立するに至つて、町人の勢力は益々增大し、佛蘭西革命の遂行は彼等の勢力によつたのである。かくの如く佛蘭西史は階級の鬪爭興亡の歷史であつた(註二一)。

佛蘭西において、かくの如き重要なる役割を演じたサン・シモンの産業者または産業者階級とは何であるか。彼は「産業者問答」においてこれに答へてゐる。

財を生産するためまたは欲望の充足のために、社會の各員に物質的資料を提供するために勞働するものは産業者である。穀物を作り、家禽または家畜を飼養する農夫、車匠、鍛冶屋、錠前屋、靴、帽子、布の製造家、商人、運送屋、商船の船員は皆産業者であり、彼等は欲望充足のための物質の生産または便宜を提供するものである。彼

等の間には、農夫、手工業者、商人の三大階級が存する（註二二）。而してこの物質的欲望の充足に有用なる階級は如何なる社會的地位にあるか。彼等はその有用性にも拘らず、現在の社會にあつては最下の社會階級を構成してゐる。革命以前においては、國民は三階級に分たれてゐた。貴族、ブルジョアジイ、産業者がこれである。貴族は支配し、ブルジョアジイと産業者は貴族に租税を支拂はねばならなかつた。然るに今日においては國民は二階級に分れてゐる。ブルジョアジイと産業者である。ブルジョアジイは革命を遂行し、彼等の利益のために、國家を搾取する排他的特權を否定した。故に今や産業者階級は貴族並にブルジョアジイに對して租税を支拂はなければならぬ。革命を遂行したものは産業者階級ではなくして、ブルジョアジイ即ち貴族でない軍人並に特權を持つてゐない市民的法律家と金利生活者である。而して、今日においても産業者は政黨中にあつて、第二義的役割を演ずるに過ぎず、彼等は何等の綱領と特有の政黨をも有してゐないのである。乍併、産業者の階級は全國民の二十五分の二十四を構成し、すべての富を生産するので、彼等は自然的權力の點においても、また金融的權力をも有してゐる。而してこれに相應する智識を有してゐる。彼等の弱點はその團結のないことにあつた。

要するにサン・シモンの産業者階級といふのは現今にいふ廣義における勤勞者階級といふやうな意味であつて、決して現代のマルクシズムにいふ純粹なるプロレタリヤの意味ではないのである。然らば斯樣な解釋をとる意義は何處にあつたか。エンゲルスは次のやうにいつてゐるが、余はこれを引用してサン・シモンを論ずる結語にしたいと思ふ。

「サン・シモンの頭の中では、第三階級と特權階級との對立が、勞働者と怠惰者との對立といふ形を取つていた。その怠惰者とは、昔の特權者ばかりでなく、亦すべての生産と商業に參加しないで、金利ばかりで生活する者であり、またその勞働者とは賃銀勞働者ばかりでなく、製造業者、商人、銀行家などの事であつた。これらの怠惰者が智力的指導者、政治的支配者たる資格を失つたことは疾くにから明白で、それが革命によつて最終の決定を與へられた。また無産者がその資格を持たないことは、恐怖時代の經驗によつて證明されたものとサン・シモンには見えた。然らば誰が指導し支配すべきであるか。サン・シ

モンによれば、科學と產業、その二つが新らしい宗敎的の紐によつて結合せられて、それが宗敎改革以後、久しく破壞されてゐた宗敎思想の統一を回復すべきものであつて、それは必然に神秘的にそして、嚴密に宗敎政治的な『新キリスト敎』であつた。然るにその科學とは、學者を意味し、その產業とは主として活動的なブルジョア、製造業者、商人、銀行家などを意味してゐた。そこでこのブルジョアは即ち一種の官公吏、一種の社會的信任者に變形すべきもので、そして矢張り勞働者と對立して、命令權あり、且つ經濟的にも特權ある地位に置かるべきであつた。

この考へは精密にフランス當時の狀態、即ち大產業が從つてまたブルジョアジイとプロレタリヤの對立が始めて、發生しかけたといふ狀態に適合するものであつた。然し、サン・シモンが特に重きを置いたのは、次の一事である。即ち彼が到るところにおいて、何ものにも增して心を引かれるのは『最も多數で最も貧困な階級』の運命である」(註二三)。

四

『新基督敎』の刊行後四十八時間にして『產業者』黨が組織せらるゝであらう。未來は吾等のものである」とは、サン・シモンの最後の言葉としてロドリグ(Olinde Rodrigues)の傳へるところである。一八二五年十月から宣傳機關として「生產者」(Producteur)が現はれたのであるが、「產業者黨」は組織せられなかつた。乍併、サン・シモンの思想はその沒後所謂サン・シモン主義者によつて、宣傳發展せられてゐるのである。「バザアル(Saint-Amand Bazard)は眞正なるサン・シモン主義者である。人がサン・シモン主義として最も稱贊し、最も恐るゝところは、サン・シモンに屬さずして、彼に屬してゐるのである」(註二四)。アンファンタン(Enfantin)並にロドリグの執筆するところは主として時事批評的のものであつたので、理論的方面に關しては、バザアルの努力を俟たねばならなかつたのであつた。而して彼の學說は最もよく「サン・シモンの學說」(Doctrine de Saint-Simon, Exposition, Première année 1828. Paris 1830)にあいて、現はれてゐるのである(註二五)。

バザアルについては、先づその歷史觀を述べることが肝要である。彼は心理的に秀れてゐる世界史の構成を打ち建てたのであつた。人類の過去並に將來の發

展の道程はすべての社會的發展がこれを規整する法則に從ふといふことを會得するとき、直ちに大觀し得るのである。バザアルによれば、人類は常に向上發展するものである。而して、人類の進歩は先づ舊組織が解體してその殘墟の上に、新らしい高級の社會組織が建設せらるゝ。故にある時期においては、積極的に創造的なる歴史時代が批判的解消的時期によつて崩壞せらるゝのである。

有機的時代の特徴は一定の理念が、一般に承認せられた權威を有することであり、すべての人は同一の思想を有し、同一の目的に對して、一意努力することである。人類はその本分を自覺して、持續的なる社會體の構成を行ふのにある。然るに、批判的時代の特徴とするところは、舊時の權威と傳統との崩壞であり、その人間感情に對する權力が主觀的批評と一般的思想の變化によつて、沒落することである。思想と感情の同一性は失はれ、社會は統一體たることを失ひ、個々分裂し、その特殊利益を追究するものの集團たるに至る。

從來文明社會の歴史には、三つの有機的時代と二つの批判的時代があつた。第一の有機的時代は大イスラエル、ギリシヤ、ロオマであつた。イスラエルにおいては、最初に學說と行爲の統一が存在した。この統一を成就したものは、モオゼであり、彼は國民に訓練と自制とを與へ、これを一體に組織し、一の神を信ぜしめたのである。かくてイスラエルは文化民族たるに至つた。乍併、イスラエル民族は未だ世界を征服して、これを文明化するといふ使命を持つてゐたのではない。彼等はたゞ神の哲學的思想を一神教に統一してこれを後世に傳へることに滿足した。この時代において、社會內部における最も顯著なる鬪爭の表徴である奴隷制度は、宗教的並に政治的影響の下に、成立したモオゼの律法によつて緩和せられたのである。ギリシヤにおいては有機的時代はペリクレスまで、ロオマにおいてはアウグストスまで續いた。ギリシヤにおいては、その藝術と學問において、ロオマにおいては、宗教の統一と國民の愛國心による世界帝國の建設によつてこの時代を表徴してゐる。

ギリシヤにおける有機的時代の解體、從つて批判的時代はソクラテスの時代から始まつてゐる。ソクラテスの舊ギリシヤ傳統の學說に對する批判的態度に始まる。哲學は宗教、道德に對して批判的となつた。かくて民族は國家を愛すること

となく、一切の倫理的並に宗教的束縛を脱して主我主義となつて、ギリシヤ的統一は失はれた。と同樣にロオマにおいても、個人主義的傾向の結果として、デカタンス的傾向が始まつたのである。

乍併、批判的時代は既に有機的時代の萠芽を有してゐる。プラトンの統一的哲學と、ユダヤ教とギリシヤ哲學との統一である基督教の成立がこれである。この有機的時代とは、基督教的世界帝國の建設から、ルウテルの宗教革命まで續いてゐる。これに照應する社會組織は階級制度の確立せられ、上下一致の態樣をなしてゐた封建制度であり、產業的方面においては、組合制度における統一であつた。然るに宗教革命以來個人主義は有機的基督教的社會を破壞し、自利の追究が擡頭した。組合制度は獨占的となつて昔時の產業統制の意義を失つた。個人主義は勝つた。批判的時代が來たのである。すべての人は孤立し、すべての人は他と鬪爭し、共同統一の機緣はすべて失はれた。

この新時代において、物質的制度は改造を受けるに至つた。かくして始めて、社會における個人の地位を決定することが出來るからである。委細に觀察すれば、從來のすべての歷史は階級鬪爭の歷史である。その性質は常に變ずるのであるが、搾取者階級と被搾取者階級との間の鬪爭であつた。個人間の鬪爭が尙ほ最も素朴的形態を採つてゐたときは、被征服者は殺されたのであつた。然るに勝利者が被征服者を生存せしめて、自身のために使役することが有利であると悟るに至ると、權力によつて、人間による人間の搾取が行はれるに至るのである。而して、それは、そのとき以來今日にいたるまで、社會を支配してゐる原則である。古代においては、被征服者は奴隸であつた。奴隸制は多くの點において緩和せられ、現代においては、自由的形式に覆はれてゐるのであるが、これが勞働大衆の運命である。中世紀においては、基督教の影響によつて、奴隸制は隸農制と化した。近代においては、隸農制も廢止せられて、自由勞働契約がこれに代つた。乍併、この自由勞働契約も單に名目上においてのみ自由であつた。何となれば、勞働はすべての所有を奪はれてゐるので、もし餓死せざらんとすれば、資本家の命令に從はざるを得ないからである。少數の例外を除いては、人が如何なる階級に屬するかを決定するものは單なる出生の事實である。即ち社會的に特權ある地位を有する支配階級に屬

するか、僅かに露命を繋ぐだけであつて、その精神的並に道德的能力を發展せしめることが出來ず、困難と貧困とによつて、遂には獸化しなければならぬプロレタリヤ階級に屬するかを決定するものは、偶然なる出生の事實に過ぎない。

今日人が一企業統制の地位に置かるゝのは、その人の勤勉にあらずして、彼が資本家または地主の相續人であつたといふ事情に過ぎない。生產の指導者は勤勉家と熟慮家にあらずして、これを決定するものは盲目の偶然である。加之、資本家と地主の追究するところは、全體の利益にあらずして、全く彼等自身の利潤にある。即ち彼等の念とするところは、勞働者の生產した生產物から出來るだけ多くの餘剩を獲得せんとするにある。小作料、家賃、利子はすべての富の眞の生產者たる勞働者が幸運なる土地及び資本の相續者に支拂ふ貢物に過ぎない。而して今日の經濟制度においては、すべての方面における自由放任主義の行はれる結果として、すべての人に對するすべての人の恐るべき競爭を招致した。その結果として何等の經濟的計畫もなければ、經濟的各部門間における調和も存在しない。從つて、諸部門における均衡の破壞は恐慌を惹起し、經濟的發展は阻害せらるゝのである。

かくの如き社會的認識の上に立つて、バザアルは社會改造の計畫を提出するのである。この點は本論に直接關係がないので省略する。

五

「フーリエの最大なる點は社會の歷史に關する彼れの解釋である」。（エンゲルス）（註二六）吾々もまたこの點から始めなければならぬ。乍併、フウリエは社會の歷史をもつて單獨の運動と考へたのではない。そは宇宙運動の一つである。この宇宙的運動は四つの部門に分れてゐる。社會的運動、動物的運動、有機的運動、物質的運動である。故に彼の處女作は「四運動の理論」(Théorie des quatre mouvements) といつた。ニュウトンの引力法則の發見以來、物質的運動の法則のみが解明せられたのであるが、社會形態並に社會的機構の發達に關する社會的運動の法則、すべての生物における衝動及び本能の分布に關する動物的または本能的運動の法則、すべての生物における特性、形態、色彩、音調等の組織に關するに有機的運動の法則、これらのものは未だ發見せられてゐない。而してフウリエは後に至つて、第五の運動を

發見した。それは電氣並に磁氣のやうな自然力の人間その他の動物に及ぼす作用に關する運動法則である。

フウリエがこの內その生涯の研究課題としたものは、社會的運動の法則である。彼はこの研究の基礎として、人間本能の心理的解剖を行つた。而して、人間本能の自由なる發展が地上の生活の調和的形成に達すべきものなのである。かくの如き本能は十二ある。人間の五感に照應する感覺的充足にその基礎を置く五つの本能を彼は「奢侈の本能」と稱した。こゝで、味覺、感覺、視覺、聽覺、嗅覺が、例へば健康によつて、また富によつて充足されなければならない。而して、富による本能の充足は充分に高く評價すべきである。何となれば、すべての自由の第一に位するものは、物質的自由であるから、富は幸福の第一源泉だからである。

次の四つの本能は團體形成に向ふものである。故にフウリエはこれを「團體の本能」と稱した。個々にこれをいへば、友情の本能、愛の本能、優越の本能、家族の本能であり、人間の小社會團の形成はみなこの本能の結果である。

以上九つの本能を調和するためには、本能集團の配置を形成すべき三つの本能が活動する。故にフウリエはこれを「配置の本能」と稱した。配置とは、種々なる上下の階段に排列せられてゐる集團の結合である。而して配置を形成する三つの本能とは、競爭、感激、交代の本能である。

以上十二の本能の共同作用が、本能の調和を作り出すのである。すべての人は、その本能の活動において、一本能の發展が他のすべての本能の發展となるやうな均衡狀態を形成せんことを望むのである。吾々の目的は相互に作用する本能の實踐的組織を形成しながら、個々の本能を抑壓せざるやうにすることにある。かくの如くして遂には全本能生活において、個人はその個々の利益を追究しながら、それによつて、全體の利益を增進するやうな調和が實現せらるゝ。而して現在において、地上に行はれるところが、調和の反對であるとすれば、即ち人々は充たされざる欲望と本能とを有するとすれば、そは明かに一の害惡である。而して、このことは人間の社會が誤れる組織の上に建設せられてゐることを立證する。フウリエはこの見地からすべての歷史的社會形態に對して鋭い批判を與へてゐるのであるが、彼が嘲笑的に「文明」といつてゐる市民的社會に對しては最も激烈なる批評

を與へてゐるのである。

フウリエは人類の生命を八萬年と推算し、萬物は流轉するといふ立場に立つて、この全體を幼年期、全盛期、衰退期、沒落期の四つに分ち、更らに、この八萬年において、人類は三十六の時期を經過すべきものと見た。その第一期の表を、彼に從つて掲ぐれば、次の如くである。

社會の第一期の階段

- K　人類發生以前
- 一　原始時代（エデン）
- 二　蒙昧または不活働狀態
- 三　家長時代　小工業
- 四　野蠻時代　中工業
- 五　文明時代　大工業
- 六　保證時代　半組合
- 七　組合時代　單純組合
- 八　調和時代　複合組合

フウリエはこの表において、人類の第八期までしか示してゐない。彼によれば、「第九期及びそれに次ぐ時代を掲げないのは、我々は現世において、第八期以上に昇ることが出來ないからであり、且つその第八期も、四つの現在の社會狀態に比較するときは、無限に幸福なる時期だからである」。而して、各期はまた數個の階段に分たれてゐる。例へば、文明時代の如きも、發展變動の時期として、幼年期（第一期）少年期（第二期）を有し、更らに全盛期即ち完備せる時代に入り、次に退歩的變動の時期が始まる。即ち壯年期（第三期）及び老年期（第四期）に至つて、沒落して、「保證の時代」に入るのである。要するに「吾々の運命は進むにある。すべての社會的時期は上の時代へと進歩しなければならぬ。蒙昧時代は文明時代に向ふべきであり、徐々としてこれを成し遂げることは自然の願望である。而して文明時代は保證の時代へ、保證の時代は單純組合へ、進むことは自然の願望であり、他の時代についてもさうである。このことは、時代中の段階についても同じである。第一は第二に、第二は第三に、第三は第四、第四は過渡狀態に進むやうに、繼續して必然的に進むのである。もし社會が餘りに良く、一時代または一段階に止まるときは、溜水と同じやうに腐敗する危險がある」。

人類はその發展の四期中全盛期並に衰退期において、社會的統一を實現し、從つて人類幸福の時代である。この兩期は他の幼年期及び沒落期に比して、その繼續期間は七倍の長きに達するであらう。要するに、フウリエは「カントが自然科學において地球の將來における沒落をいつたやうに、彼は歷史觀察において、人類の將來における沒落をいつたのである」。（エンゲルス）乍併、吾々人類は未だ人類發展の幼年期にゐるに過ぎぬ。人類社會の形成せられてから七千年を經過したに過ぎず、然も苦惱から苦惱へと變轉して、僅かに文明時代に達したに過ぎない。文明時代の社會批評はフウリエの最も力を盡せるところであつた。

フウリエによれば、文明時代たる現代においては、內的並に外的調和を齎らすやうに、人間の本能は自由に作用してゐない。人はその內部において鬪爭してゐると共に、その同胞とも鬪爭してゐる。名譽心は愛情、家族的感情、友情に對して反對の作用をなしてゐる。かくの如くして、人間の本能は常に不調和の狀態にある。この本能の鬪爭から、すべての本能を抑壓すべしといふ道德が生れた。乍併、こゝに抑壓するといふのは、組織化し、または調和するといふ意味ではない。更らに、一人の萬人に對する鬪爭と、萬人の一人に對する鬪爭が行はれ、何處においても、個人的利益と一般的利益の對立が行はれてゐる。醫者は國民中の多數が病者たることに利益を得、僧侶は多數の死者あることを、辯護士は無數の訴訟を、高利貸は多數者の貧困を、建築家は火事を欲するに至つてゐる。これを勞働の方面に見ても現在の勞働は決して愉快ではない。かくの如き狀態にあつては、勞働生產物の量は僅少ならざるを得ない。この點において農業は一層甚だしい狀態にあるのである。

文明時代の最大の弱點は商業である。從來商業に關しては、數千卷の著述が著はされてゐるのであるが、何人も商業の機構が健全なる人間の理性に反してゐることを指摘してゐない。商業は社會體をして、不生產的代理者たる一階級に從屬せしめてゐる。不生產的代理者とは商人である。農業者、工業の所有者のやうなすべての實質的階級及び政府すらが、第二義的階級であつて、彼等の從屬者、被委任者、罷免し得、責任を有すべき代理者たるべき商人階級に支配せられてゐる。事實においては、商人階級はすべての流通機關の主權者的支配者である。商人達は、大

財産家と了解の上で、獨占會社を設立して、すべての小財産家を商業奴隷とし、聯合的勢力によつて、すべての生産の支配者たる地位に達した。かくて小財産家は彼等のために搾取せらるゝ。要するに、商業的結合の上に基礎を置く新らしい封建制度が樹立せられたのである。この封建制度は自らを國家と同一視し、すべての市民をして商業的獨占に屈從せしめ、商業自由の原則を廢したのである。

産業の發達と共に、民衆の貧困もまた增加する。商業利潤獲得の努力は、熱帶地方を黑色奴隷をもつて被ひ、溫帶地方においては、産業的牢舍である工場に白色奴隷を追ひ込むに至つた。かくの如きところに何の正義が存するか。自由は幾度か叫ばれ、且つ與へられた。然もそは政治的自由である。乍併、重要なることは、政治的自由ではなくして、僅えたるとき食するを得るが如き物質的自由である。今日においては、財産を有し、常に職を有するものゝみ食することが出來るのである。生活の基礎である勞働を保證してこそ、自由を與へたものといひ得るのである。この點において、政治的自由は何等實質的なる幸福を齎らさない。從つてこの意味の政治的自由をその內容とする自由主義も社會をかくの如き狀態から救濟することは出來ないのである。そは民衆に保證の幻想を與へたに過ぎない、その形式である代議政治は、租稅の輕減を主たる目的をもつて行はれたのであるが、そは反つて、租稅を增加し、國債を增大せしめたに過ぎぬ。而して、文明國家の基礎は、現在においては、銃劍と僅餓とに存するのである。銃劍と僅餓とをもつてする支配にその基礎を置くのである。

フウリエは以上のやうに、歷史を見、現代を批判した。彼の歷史觀は甚だ空想的であるが、彼が社會の繼起的變動を萬物は流轉するといふ立場から主張したこと、並に近代社會において商人階級が全社會に對して階級的支配を行つてゐるといふ點については、吾人の首肯し得るところである。たゞ彼の近代社會の解剖はその害毒の指摘に忙はしくして、社會階級の性質その相互間の鬪爭についての、認識は決して充分といふことは出來ない。この點においては階級鬪爭を中心とした歷史觀を樹立したサン・シモンは彼に優るといふことが出來よう。蓋し、フウリエの個人主義的出發點が集團としての階級現象を正確に認識することを妨げたのであらう（註二七）。

六

フウリエを論じた筆者は、更らにフウリエ主義者ヴィクトル・コンシデラン(Prosper Victor Considerant)について數言を費さねばならぬ。彼はフウリエの學說を最もよく世に流布せしめた一人である。彼はその名著「社會運命論」(Destnée sociale 1835-1844)において、フウリエの學說を祖述するといもに、多數の著述において、フウリエ主義を宣傳說明してゐる。而して彼の學問的貢獻は實にフウリエに倣つて、社會問題を研究した點に存するのである。彼はその師と同じく、現代の社會における害惡を重要視し、商工業に對して限りなき憎惡を感じたのであつた。而して、この社會的害惡を矯正するものはたゞ平和的なる資本と勞働と才能とを結合せしめる組合を組織するにありとなしたのであつた。

コンシデランの歷史的考察は古代に始まつてゐる。古代社會は暴力を原則並に法律とし、戰爭を政治とし、征服を目的とし、奴隷制度をもつて、經濟組織とした。故に奴隷は經濟財を生產し、自由民はこれを消費した。從つて奴隷の所有數の大小は物質的幸福の如何の決定せらるゝところであつたので、すべての戰爭の目的は奴隷の獲捕にあつた。即ち最も殘忍にして、最も野蠻なる、然かも最も完全なる形態における人間による人間の搾取が行はれてゐたのである。封建制度もまた征服の結果であつた。そは極めて組織化せられた征服に過ぎなかつた。その主なる事業は戰爭であり、從つて征服の原始的特權を神聖なものとした。その經濟組織は奴隷に代ふるに農奴制度をもつてしたのであるけれども、人間による人間の搾取たるに變りはなかつた。而してこの農奴制度は一七八九年の革命にいたるまで嚴然と佛蘭西に存在した。而して、基督教の普及もまた封建的階級制度の要求に順應せる程度に過ぎなかつた。事實において、征服者の子孫である貴族は曰には基督教的博愛の教義を唱へてゐたのではあるが、すべての平民をその足下に抑壓した。要するに封建時代の精神と法律とは、貴族的精神並に法律であつた。而して、この精神と法律とは、幾多の社會的進步にも拘らず、一七八九年の革命にいたるまで佛蘭西に存在したのであつた。

一七八九年の革命といもに、新らしい社會組織が現はれた。工業と科學の勃興によつて封建制度の拘束は完全に排除せられた。智識が野蠻なる暴力に勝利を

獲て、すべての市民の法律の前における平和が認められ、而して百年の長きに渉つて望まれてゐた國民代表權は實施せられ、立憲主義が勝利を獲得した。かくの如く佛蘭西革命は祝福すべき作用をなした。乍併、この革命はたゞ市民的社會をその政治的方面における改革のみを要求して、同時に勞働の正當なる組織の不實行によつて經濟的方面における改革を遂行しなかつたのであつた。

組合制度の廢止、營業の自由並に自由競爭の確保によつて從來行はれてゐた特權を廢することによつて、また新らしい封建制度が形成せらるゝに至つた。軍事的征服に代ふるに、產業的征服が行はれる。封建貴族に次いで起つたものは封建的產業である。而してその貴族稱號たるものは資本である。この封建制度においても、弱者に對する强者の勝利が行はれる。勞働者は資本の隷屬者であり、無資產者は自由競爭の犧牲者である。而して、自由競爭は大資本の勝利を齎らし、同時に小產業を壓迫し、勞銀の値下を企業家に强要する。かくの如くにして、市民的社會は二つの敵對せる陣營に分岐する。少數者は大なる程度において、特權を有し、大多數者は何等の財も享樂品をも所有しないのである。

故にコンシデランはその著「社會主義原理、第十九世紀民主主義宣言」(Principes du socialisme, Manifeste de la démocratie au XIXX siècle)の前編中にいつてゐる。

「產業的自由といふ名許りで、其實恐ろしく不平等な條件の下に行はるゝ此鬪爭の第一の結果は、プロレタリヤが忽ち集合的隷屬狀態に陷落することである。是と全く同樣に不可抗的な第二の結果は、中小財產、中小工業、中小商業が巨大なる財產の壓力と大商工業の巨大なる車輪のために急速に潰滅しつゝあることである。その部門の如何を問はず、實際において、大資本、大企業は小資本、小企業を支配する。蒸汽、機械、大工場は、その現はるゝや、到るところで中小製造場を譯なく壓倒して仕舞つた。是等のものが發生するとゝもに舊來の手工業職人は影を潛めて跡に殘れるものは、たゞ近世的工場とプロレタリヤだけである。……」

「かくて、產業的自由といふ名のみの民主的原理にも不拘、あるひは寧ろ單純で組織の伴はないすべての自由と同樣に虛僞で、欺瞞的なこの自由の結果として、資本は全く均衡を失して大衆の增加と正比例して、資本に吸收され、軈ては最も有力なる所有者の手に集中される。そして、社會は漸次明かに二大階級に分裂

する傾向がある。而して、二大階級とはすべてのものゝ或は殆んどすべてのものを所有する少數者、即ち所有の領域内における總ゆるものゝ絶對的支配者、商工業の絶對的支配者と、何ものも持たず資本並に勞働要具の所有者に絶對的な集合的服從の生活を營み、不安定にして而も常に遞減する賃銀のために、自己の兩腕才能及び熟練力量を近世社會の封建的領主に賃貸するの餘儀なき多數者これである」。

「現代において普遍的獨占が少數者階級の掌中に移れば、やがて此階級に對して、最も恐怖すべき、呪詛が累むことは必定である。……

……果して、賢明なる政府、聰明にして自由なるブルジョアジイ及び科學がよくその對策を講ずることゝしなければ、歐洲社會を震駭せしむる此運動は一路社會革命に趨き、吾人又歐洲を擧げての暴動に逢著すべきは火を睹るよりも明かである」。

コンシデランは階級鬪爭が近代的社會の必然的産物であることを認識し、この故に階級鬪爭を終焉せしむべき社會改良策を樹立せよと叫ぶ。そはフウリエの社會改良策である。コンシデランの社會的認識において、殊にこの「社會主義原理」において、マルクス　エンゲルスの「共産黨宣言」における用語文章とある類似を持つてゐる。この故にロシヤの無政府主義者チェルケゾフはマルクス＝エンゲルスのコンシデラン剽竊を云々してゐる。筆者は後段に少しくこの點に觸れるであらう（註二八）。

七

佛蘭西革命以後の同國の歴史を社會學的に觀察した人はルイ・ブラン（Louis Blanc）である。彼はその「十年史」（Histoire de dix ans 1830-1840, Paris 1841-1844）において、このことを爲した。一八一五年から一八四〇年までの佛蘭西の歴史を觀察するに當つて、ルイ・ブランは種々の政治現象を觀念の作用からは説明することが出來ないと見て、これを種々なる階級の經濟的努力にその説明を求めようとした。例へば、ナポレオンの沒落の原因はブルジョアジイ發展の法則中にありとした。而して、當時の歴史的現象の根底に向つて考察すれば當時の鬪爭は封建制度の理念と

ブルジョアジイの利益とを環つてゐるのである。要するに人類は、その實現せんとする事物の玩具に外ならない。かくの如きが經濟的機構に對するルイ・ブランの思想であるが、この經濟的機構は、何等の觀念にも支配せられず、また個人の努力の影響も受けないものであるが、これこそ、歷史的現象を發生せしめるものである。要するにルイ・ブランの歷史觀は、歷史が次の二つの要因によつて支配せらるゝといふにある。(一)經濟的欲望、即ち一階級の他の階級に對する抑壓並に被抑壓階級の反抗、一言にしていへば階級鬪爭を發生せしめるものである。(二)技術の進步、この二つである。ルイ・ブランはかくの如き見地から當時の歷史を觀察したのであつた(註二九)。

ルイ・ブランによればナポレオン帝國の崩壞とルイ第十八世の踐祚はブルジョアジイの利益のためにする彼等の事業であつた。而して、復辟のすべての政治的運動はブルジョアジイにおける王制を否認することなく、これを克服せんがための努力によつてなされたのであつた。ブルジョアジイの勝利的進展は、ルイ・ブランによれば、封建制度征服以來の歷史的必然であつた。然らばブルジョアジイとは何か。ブルジョアジイとは器具または資本を所有して、自己の資料をもつて、勞働するが故にある程度まで他に依存することなき市民の全體を指していふのである。民衆とは何等の資本をも所有せず、從つて、生活必需的欲望において全然他に依存する市民の全體を指していふのである。而して、かくの如きブルジョアジイの勝利が歷史的必然たるに至つた。ナポレオンの如きも、一見するときは、產業にその注意を向けることが甚だ少ないやうに見えるのであるが、これは事實ではない。彼は商業、工業、金融の事柄については、憲法議會の事業を繼續し、經濟的利益を大いに促進した。彼は行政技術的の施設によつて、產業の發展を促進せんとすると共に、同時に、貴族政治を再現せしめんとした。而して、この二つの目的のために、彼は獨裁者たると共に、軍師でなければならなかつたのであるが、この點にナポレオンの嶮峻なる運命は横はつてゐたのである。

乍併、ブルジョアジイはたゞ平和と自由との條件においてのみ、發展し得るのであるから、戰爭恐怖の巴里に平和を望む貴族が存在し、勝利に際して借入金を夢みる銀行家がをり、ナポレオンと英國との決戰に被害を蒙つた製造家並に商人、これ

らの人々がナポレオン沒落の要因たることは容易に說明し得るであらう。

かくの如くして、ナポレオンの沒落の原因はブルジョアジイ發展の法則中にあつた。而して、嘗ては强大なる權力を有してゐたナポレオンを失墜せしめたものが、この階級の勢力にありとすれば、新らしい政治形態は勿論彼等の利益增進を勤めるものであることは當然であつた。而してブルジョアジイの勝利を確保して、その利益を主張する根本條件は、出來るだけ大なる政治的勢力を獲得するにある。その目的のためには、强力なる政府は大なる障害であつた。故に、ブルボン家の一人に王冠を戴かせるに至つたのである。ブルジョアジイは嘗て、强力なる軍隊と帝政とのために、その急速なる發展を阻止せられたので、今や、ブルジョアジイの支持を必要とする內的勢力も、國民性も根柢もない政府を要求した。而してかくの如きがブルボン王朝であつた。ブルボン王朝は諸外國の援助の下に、ブルジョアジイの要求によつて、佛蘭西に復活したので、佛蘭西は諸外國に對しては從屬的地位に置かれねばならなかつた。この點を、ブルジョアジイは苦痛としたのであるが、彼等はブルボン王朝の復辟によつて、獲得した產業的支配並にその結果たる富の獲得によつて、充分この屈從を償ふものと考へたのである。

ルイ・ブランの見解によれば、これに次く時代もまたブルジョアジイの利益によつて支配せられた時代であつた。ナポレオンのエルバ島からの復活後、彼はブルジョアジイの意志に反して、最早崩壞してゐる貴族的支配に手を延べ、時代後れの思想を持つてゐる人々と國政を處理しようとしたので、彼の新帝政は、その基礎を砂上に打ち建てた樓閣に均しいものであつた。ナポレオンは、ブルジョアジイと協調することを忘れた。然も尙ほブルジョア的利益と自由思想の代表者であるフウシェ（Fouché）をその大臣として認めなければならなかつた。かくの如くして、ナポレオンも永くその地位を保持することが出來なく、再びブルジョアジイの聯合的勢力をもつて、沒落するに至つた。

ブルジョアジイは、一八一四年に始めた事業を完成して、それに續く十五年間において、その支配權を擴大普及した。即ちブルジョアジイは選擧制をその利益のために利用し、議會的權力をその手中に收めるために、國家的活動の範圍にその勢力を浸潤せしめた。故に一八一五年から一八三〇年までにおいては、封建制度の

思想とブルジョアジイの利益のためにする鬪爭が行はれ、終極において、ブルジョアジイの勝利に終つてゐるのである（註三〇）。

以上のやうな歴史の經濟的解釋はまたプルウドンの「人類における秩序の創造」（De la création de l'ordre dans l'humanité 1843）においても表はれてゐる。プルウドンによれば、人間の社會生活は何處においても、自然的なる合法性によつて支配せらるゝ。而して、社會組織の根柢たるものは財産であつて、財産の存在しない限り、産業的進歩を考へることが出來ないといふ點で根本的の意義を有してゐる。而して、産業の發展と器具の完成とは、社會的進歩一般の測定尺度である。從つて、人間の中心的活動は勞働である。すべての動物中、勞働する唯一のものは人間であり、この點において人間の他の動物に對する優越は證明せらるゝのである。何となれば、勞働によつて資料に作用することは、進歩を意味するからである。故に勞働は社會の創造的形態である。かくて經濟は人間に對して最も重要性を有する。故に、歴史解明の鍵は經濟學にある。彼に從へば、社會的混亂は經濟法則無視の必然的結果であつた。ギリシャは産業的活働を蔑視したが故に沒落した。ロオマは農業的利益の代表者を政府に見出さなかつたゝめに崩壞したのであつた。

プルウドンはまた歴史における階級鬪爭の意義をよく評價してゐた。クウザンはすべての政治的革命をもつて、新觀念の實現過程として理解してゐた。然るにプルウドンに從へば、社會においては、觀念は人間行爲の出發點である利益を反映するので、從つて從來行はれてゐる觀念を驅逐せんとする新觀念の努力は、大なる反抗に當面する。而してこの場合勝利を決定するものは、理性への訴へでなくして、たゞ暴力である。歴史はこのことを證明してゐる。平民の解放は貴族並に僧侶の反抗に當面して、内亂を發生せしめ、次に貴族の强力なる反對者としての立憲的絶對王制に對して、議會と第三階級が勃興した。而して、この對立は異れる原理の對立ではあるが、原理の承認强制においては、常に鬪爭が喚び起されて、鬪爭がその原理の實際的適用を決定するのである（註三一）。

八

第十九世紀前半の主要なる佛蘭西社會主義の階級鬪爭說は以上において、大體說明し得たつもりである。彼等の學說は他の機會においてもいつたやうに、決し

て突如として起つた學說ではない（註三十二）。そは前代並に同時代の第三階級的立場を採る論者の見地に頗ぶる類似せる點が存する。たゞ彼等とこれとの相異は、一方が第三階級的立場に立つに反して、多くの所謂空想的社會主義者の立場が博愛平等といふやうな理念的立場――これを全人類における立場、マルクス流にいへば、小ブルジョア的立場――にあることである。而して、第三階級的見地は第三階級が既に社會における――從つて政治における支配權の確立なる事實に照應して、過去における第三階級の階級鬪爭における功業を讃美し、現狀の維持の意味における階級平和論に變轉したのであつた。然るに社會主義者の議論は第三階級革命の封建的貴族並に僧侶の支配權を打破したことを認めるけれども、これをもつて實質的意義における自由と平等の世界を實現したといふことを承認しない。反つて、ブルジョアジイのいふ自由と平等の世界は、その實質において新らしい封建的特權の設定であり、從つて、この特權に反抗する勤勞者階級の反抗は激烈なる階級鬪爭を釀成し、社會的平和を破壞するが故に、かくの如き階級鬪爭を廢絕せしめるために、正義の原則に從つた新らしい社會を建設せよと叫ぶのである。この意味において、ブルジョア的階級鬪爭論者は保守主義者であり、所謂空想的社會主義者は社會改良論者である。

カアル・マルクスはこの點において、如何なる關係に立つか。彼は兩者とは共に異れる立場にあることは、周知の事實である。彼は空想的社會主義者のやうに、理性に訴へて、ブルジョアジイ對プロレタリヤの鬪爭を廢止せしめやうとはしなかつた。彼の立場は「萬國の勞働者よ！結合せよ！」といふ「共產黨宣言」末尾の言葉によく現はれてゐる。プロレタリヤによる政權の掌握が彼の共產主義の目的であつた。この點において彼は階級鬪爭の意義を一層實踐的に把握して、鬪爭の自然的經過に放任することゝ即ちプロレタリヤ側における鬪爭の組織化によつて、鬪爭そのものゝ廢絕を實現しようとしたのである。空想的社會主義者の多くは、階級的鬪爭の經濟的原因に存することを認めながら、而してその多くは理性の外的條件に左右せらるゝことを認めながら、理性の要求による鬪爭の廢絕を主張した。この點に彼等のマルクスに優越することの出來ない理論的缺陷が存するのである。

然らば、過去の歷史的現象に對する階級鬪爭的觀方においては如何。空想的社會主義者の多くは、歷史決定の要因として、あるひは生產といひ、あるひは、財產といつてゐる。サン・シモンの如きは、政治學が生產の科學でなければならぬことを主張してゐるにも拘らず、生產そのものゝ內容が甚だ不明瞭である。それと共に、彼は智識の歷史的役割を甚だ重要視してゐる。而して兩者の關係は吾々に對して、不充分にしか理解し得ないのである。ルイ・ブランの如きは歷史の推進力として、階級鬪爭と技術の進步の二つを擧げてゐることは、既に記したが、而して、この二者を擧げる點において、マルクスに甚だ近いものがあるのであるが、これも、バウル・バアトの指摘してゐるやうに、兩者の關係が綜合的關係に置かれてゐない。兩者の關係を綜合して始めて、唯物的歷史觀を確立したのが、カアル・マルクスである（註三三）。

階級分析の內容においても彼等には幾多の缺點がある。勿論既にサン・シモンを評する場合に引用したエンゲルスの文章の明かにいつてゐるやうに、彼等の分析の不充分であつたことは當時の社會階級發達の不充分なるによるのである。故にマルクスに比較的近いコンシデラン及びルイ・ブランの如きは、觀察する事實の近似によつて、類似の階級分析を行つてゐる。これあるが故に、チェルケゾフはマルクスのコンシデラン剽竊問題を主張するに至つた。このとき以來廣く無政府主義者の間では、マルクス「共產黨宣言」がコンシデランの「社會主義原理」の剽竊なりとする主張が行はれてゐる。コンシデランの同書には、成程無政府主義者諸君の主張するが如きマルクス「共產黨宣言」との類似の文章の存在することは否定し得ない。たゞ問題となることは、文章の類似そのことが直ちに剽竊を證明するものか否かである。筆者はマルクスのコンシデラン剽竊を否定する。何となればマルクスの「共產黨宣言」とコンシデランの「社會主義原理」――この書の前半は幸ひにして平井新氏の努力によつて邦譯せられてゐる――とを讀むものは、誰人もその文調の著しく異れるを感ずるであらう。コンシデランは階級鬪爭の事實を認める。而して、この階級鬪爭を害惡と認めるが故に、合理的社會制度の考案によつてこれを廢絕することが、歐洲における賢明なる政府並にブルジョアジイの緊急の任務なりといひ、マルクスは階級鬪爭におけるプロレタリヤの階級的組織を完成することによつて、階級鬪爭におけるプロレタリヤの勝利を豫言するものであ

る。その精神においては、天地の隔りが存する。この問題に對する決定的解答者カウツキイはマルクスのコンシデランの剽竊を云々するのは、同時代における社會主義學說中コンシデランのみを讀んだものゝみこれを主張するといつたのは蓋し適評といふべきであらう。

而して、エンゲルスの「吾々獨乙の社會主義者は、サン・シモン、フウリエ、オウエンに由來するのみならず、またカント、フィヒテ、ヘエゲルに由來することを誇りとする」といふ言葉は彼等の學說の淵源を簡潔に表現したものとして有名である。而して同じエンゲルスが近世社會主義の本質を論じて次の如くいつてゐる。「近世社會主義は先づその實質から言へば、一面には今日の社會に行はれてゐる有產者と無產者、資本家と賃銀勞働者の階級對立の認識、一面には生產界に行はれてゐる無政府狀態の認識から生じた產物である。けれどもその論理的形式から云へば、近世社會主義は元來第十八世紀のフランス諸大家の主張した諸學說を一層前進させた所の、外見上、それを一層徹底させた所の繼續說として現はれてゐる。だから近世社會主義はその根本が如何に深く物質的、經濟的の事實の上に置かれてあらうとも、他のすべての學說と同じく兎にかく先づあり合せの思想的材料をとらねばならなかつた」と。（註三四）これらの文章はあまり有名であるが、それだけ、またチェルケゾフのマルクシズムの獨創性に關する誤解を解くに足るものと信ずる（註三五）。余はこの點においてカウツキイ＝平井說に左袒することを辭せざるものである（註三六）。

要するにマルクスは、以上の諸說に對して、數歩を進めたものであつた。然るにこれらの諸說は皆マルクス以前に出てゐるものであつて、恐らくマルクスに、影響を與へてゐるものであらう。このことは彼の學問研究生活の覺え書きとも見るべき「經濟學批評」の序文によつて窺ふことが出來る。彼はいつてゐる。「私（マルクス）の專門的研究は法學であつたけれども私はそれをば、哲學及び史學に對して附隨的な學問としてのみ修めた。然るに一八四二年から四三年の間、ライン新聞の記者として、所謂物質的利益に關する論爭に參加せざるを得ざるに至つた時、私は始めて困惑を感じた。森林盜伐及び土地所有權の零細化に關するライン議會の討議、當時ライン州の大總統たりし、フォン・シャーペル氏が、モーゼル農民の狀態に

關し「ライン新聞」を相手として起した公の論爭、最後にはまた自由貿易及び保護關稅に關する議論、これらのものが經濟問題に關する私の研究に最初の動機を與へたのである。他方において、その當時は「更に前進しよう」とする善良なる意志が、屢ば事實の認識を妨げる時代であつたが、フランスの社會主義及び共產主義の弱い哲學色を帶びた反響が「ライン新聞」にも聞えるやうになつてきた。私はこの不手際の細工物に反對を宣言した、然しそれと同時に「アルゲマイネ・アウグスブルグ・ツアイツング」との或る論爭において、私の從來の研究はフランスの此等の思潮の內容自體について、何等かの批判を下すには、なほ不十分であることを卒直に認めた。ところで「ライン新聞」の重役達が筆鋒を和ぐることにより、それに向つて下された死刑の宣告を免れ得るとの妄想を抱いてゐる際、私はむしろ喜んでこの機會を捉へ、公の舞臺から書齋に退くことにしたのである……經濟學の研究は私はこれをパリで始めたが、ギゾー氏の追放命令の結果として私はブルッセルに移つたので更らにその地で之れを繼續した」（註三七）。　マルクスはかくて、巴里において佛蘭西社會主義の研究に從事して、恐らく、以上の諸論者の著作はこれを熱心に研究したであらう。

然るに、マルクスに對する獨乙古典哲學殊にヘエゲルの哲學の影響はその一生を通じて大であつたといつていゝ（註三八）。然らば、ヘエゲル學徒は階級現象に對して如何なる見解を有してゐたか。マルクスがライン新聞の記者當時に佛蘭西から獨乙に入り來つた社會主義並に共產主義は如何なる果實を理論的に結んだか。マルクス階級鬪爭論前史の研究に對しては、これらの研究も甚だ重要であらう。而して更らに重要なる一事は、マルクスが經濟問題に興味を感じ始めた一八四二年に當つて、法學研究のために永らく巴里にあつて、社會運動を深く研究したロレンツ・フォン・シュタインの「佛蘭西現時の社會主義及び共產主義」（Der Sozialismus und Kommunismus des heutigen Frankreichs 1842）の出版である。この書は始めて、プロレタリヤ階級の歷史的意義を明確に把握した著書とせられてゐる。シュタインが如何なる意義においてプロレタリヤ階級の歷史的意義を解明したか。而して、この重要なる著述が如何なる關係をマルクスに對して有したか。このことはある論者（メエリング）はマルクスに對するシュタインの影響を否定し、他の論者（シュトル

ウヴェ）はこれを肯定してゐるので問題に甚だ興味がある。筆者は筆硯を新らたにして、これらの諸問題を論究し、而してマルクス以前における階級鬪爭說發達史概觀の一篇を終りたいと思ふ。

一九二八年九月十八日稿了

註

一　Walter Sulzbach, Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung 1911. S. 51 ff.

二　Th. Rotstein, Verkünder des Klassenkampfes vor Marx. Neue Zeit. 26. Jahrg. I. Bd. 1908. Ss. 836 ff.

三　Karl Marx, Das Kapital. Volksausgabe I. Bd. Ss. 82. 308

四　Hans Girsberger, Der utopische Sozialismus des 18. Jahrhunderts in Frankreich und seine philosophischen und materiellen Grundlagen 1924.
H. Lindemann, Der Sozialismus in Frankreich in siebzehnten und achtzehnten Jahrhundert. Vorläufer des Sozialismus. IV. Bd. 1922.

五　Friedrich Engels, Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. 7 Aufl. S. 17.
堺利彥譯　社會主義の發展　白揚社版　九頁

六　Girsberger, Der Utopische Sozialismus. S. 237 ff.

七　Engels, op. cit. S. 21. 堺譯　一七——一八頁

八　「一ヂュネーヴ住民の書翰」については、小泉順三氏の詳細なる紹介がある。「一ヂュネーヴ住民の書翰に現れたるサン・シモンの思想」三田學會雜誌第二十二卷第六號所載

九　小泉順三　前掲論文參照

一〇　平井新「マルクス階級鬪爭起源考」三田學會雜誌第十九卷第十一號一二五頁以下にサン・シモンの「產業者問答」における階級鬪爭說の紹介がある。平井氏のこの論文はマルクス以前の階級鬪爭說を英、佛、獨に涉つて記述評論した雄大なる論文である。尙ほ加田哲二著近世社會學成立史一八三頁以下にもサン・シモンに關する記述がある。讀者諸君の參考を望む。

一一　Paul Barth, Philosophie der Geschichte als Soziologie. I. Bd. 1922. S. 174.

一二　Saint-Simon, Systeime industriel 1821-1822. 引用はすべて、Gottfried Salomon, Saint-Simon und der Sozialismus. 1919 (Wege zum Sozialismus) 中の下記の獨譯による。Aus dem „Industriellen System." Ss. 45-46.

一三　Saint-Simon, Industrielles System. Ss. 46-47.

一四　Saint-Simon, op. cit. S. 47.

一五　Saint-Simon, op. cit. S. 48.

一六　Saint Simon, op. cit. Ss. 48-49.

一七　Saint-Simon, op. cit. Ss. 49-50.

一八　Saint-Simon, op. cit. S. 50.

一九　Saint-Simon, op. cit. S. 51.

二〇　Saint-Simon, op. cit. Ss. 52-56.

二一　Saint-Simon, Catéchisme des industriels 1824. Deutsche Übersetzung, Aus dem "Katechismus der Industriellen," in Salomon, op. cit. p. 72. ff.

加田哲二　前掲著書　一八八——一八九頁

二二　Saint-Simon, Katechismus. S. 72.

二三　Engels, Entwicklung des Sozialismus. Ss. 20-21.

堺譯本　一六——一七頁

二四　S. P. Thureau Dangin, Le parti libéral sous la Restauration, Paris 1876. zitiert von Gottfried Salomon: Die Saint-Simonisten. in der Zeitschrift für die Gesamte Staatswissenschaft. 82. Bd. 3 Heft 1927. Ss. 558-559.

二五　バザアルの學說に關する叙述は、主として Prosper Enfantin, Die Nationalökonomie des Saint-Simonismus. に對するゲオルヒ・アドラアの長文の序文 Einleitung von Georg Adler による。尙ほバザアル研究としては獨乙で次のごとき書物が出版されてゐる。
Dr. Willy Spühler, Der Saint-Simonismus Lehre und Leben von Saint-Amand Bazard 1926.

二六　Engels. Entwicklung der Sozialismus, S. 22.

堺譯本　二〇頁

二七　フウリエの記述に關して次の諸書に負ふところ最も多し。
Georg Adler, Fourier und der Fourierismus. Einleitung zu Viktor Considerant, Fouriers System der sozialen Reform. Deutsche Übersetzung von Hugo Haak (Hauptwerke des Sozialismus und der Sozialpolitik 6. Heft.) 1906.
Julia Franklin, Selections from the Works of Fourier. Introduction by Charles Gide. 1901. Käthe Morgenroth, Fourier und der Sozialismus (Wege zum Sozialismus.) 1920.

二八　コンシデランに關しては、次の書による。
Otto Warschauer, Zur Entwichlungsgeschichte des Sozialismus. 1909. Ss. 163-ff.
コンシデラン『社會主義原理、第十九世紀民主主義宣言』前編　平井新譯　三田學會雜誌第二十二卷第四號　引用の譯文は平井氏の譯文による。

二九　Paul Barth, Philosophie der Geschichte als Soziologie. Ss. 659-960.

三〇　Friedrich Muckle, Saint-Simon und die ökonomische Geschichtstheorie, 1906, Ss. 25 27.

三一　Muckle, op. cit. Ss. 27-30.

三二　拙稿「佛蘭西革命前後における階級鬪爭說概觀」社會學雜誌　本年十月號以下參照

三三　Paul Barth, op. cit. Ss. 661-662.

三四　Engels, Entwichlung des Sozialismus, S. 15. 堺譯本三頁。

三五　Engels, Entwicklung des Sozialismus. S. 5.

三六　Karl Kautsky, Das Kommunistische Manifest ein Plagiat. Neue Zeit. 1906.
平井新　「共產黨宣言」剽竊問題　三田學會雜誌第十九卷第六號
チエルケゾフの所論並にそれに有利なる所論を集成したものには次の書がある。延島英一譯　「共產黨宣言の種本」一九二七年　金星堂版

三七　マルクス「經濟學批判」宮川實譯　序言二——三頁

三八　Engels, Fudwig Leuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie. 參照